現代中國語の源氏物語

高田　友

現代中國語に翻譯せられたる源氏物語を漢文の如くに訓讀せり。

話說從前某一朝天皇時代、后宮妃嬪甚多、其中有一更衣、出身幷不十分高貴、却蒙皇上特別寵愛。

話に說く、かつて某る皇の御代に、後宮妃妾甚だ多し。うちに更衣一人あり、親の家、幷も位高からずといへども、帝の特別なる惠を蒙むる。

有幾個出身高貴的妃子、一進宮就自命不凡、以爲恩寵一定在我、如今看見這更衣走了紅運、便誹謗她、妬忌她。

高貴き家より來れる妃幾個かあり、一度宮に召さるるや自ら凡ならずと定め、以爲帝の恩寵必ずや我にあらんと。今かくの如くに更衣の紅運に遭ふを見て、すなはち她を譏り、また妬む。

和她同等地位的、或者出身比她低微的更衣、自知無法競爭、更是怨恨滿腹。

她と同等の地位にありし、あるは她よりも位低き更衣どもは、自ら競ひ爭ふの法なきを知り、怨恨腹に滿つること更なり。

這更衣朝朝夜夜侍候皇上、別的妃子看了妬心中燒。大約是衆積集所致吧、這更衣生起病來、心情鬱結、常回娘家休養。

這の更衣あしたにゆふべに皇上にさぶらふ。餘の妃妾妬みの火に心を燒く。大約くは斯る怨みのつもりたるがゆゑなり吧、この人つひに病を生起し來り、心情鬱として樂しまず、常に娘家に回りて身を養ふ。

皇上越發捨不得她、越發憐愛她。竟不顧衆口非難、一味徇情、此等專寵、必將成爲後世話柄。連朝中高官貴族、也都不以爲然、大家側目而視、相與議論道：

皇上いよよ她を捨つるを得ず、憐れみ給ふこと類ひなし。竟むや、諸人の愁へをかへりみたまふなく、專ら情にしたがふ。かくのごとき只管なる大御心、必ずや後の世に話の柄となりて殘らむ。朝中の大宮人みな、もつて然りとなさず、悉く目を側め、たがひに眉をひそめて語る。

「這等專寵、眞正教人吃驚！　唐朝就爲了有此等事、弄得天下大亂。」　這消息漸漸傳遍全國、民間怨声載道、認爲此乃十分可擾之事、將來難免闖出楊貴妃那樣的滔天大禍來。更衣處此境遇、痛苦不堪、全賴主上深恩加被、戰々恐々地宮中度日。

「斯の如き方端なる惠み、眞に人をして吃驚せしむるに足る。唐朝にもかかる殃ありしがゆゑに、天が下おほいに亂る」と。この消息、やうやうに世に廣まり、民の怨み空に滿ちて、以爲、これ卽ち憂ふべきのこと、いつの日にか楊貴妃の儀や紛ふ禍來たりて天つ御空をしも犯すらむと。更衣はかかる歎きを如何ともするなく、苦しみに堪へず。一重に大御心の深きに縋りて、戰きつつ宮居のうちに日を渡

る。

這更衣的父親官居大納言之位、早已去世。母夫人也是名門貴族出身、看見人家女兒雙親俱全、尊榮富厚、就巴望自己女兒不落人後、每逢參與慶弔等儀式、總是盡心竭力、百般調度、在人前裝體面。只可惜缺乏有力的保護者、萬一發生意外、勢必孤立無援、心中不免凄涼。

更衣の父は大納言に至りしも已に世になし。母の君もまた殿上人の家に出づ。人の家の娘兩親そろひ、その身榮ゆること篤きを見て、卽ち我が娘の人の尻邊に落ちざらむことを巴望ひ、さまざまの儀式に招かるる毎逢に總てこれ心を盡し力を竭して、もろもろの支度を調へ、人前に體面を繕ふ。ただ惜しむらくは、權柄握りたる後ろ盾を缺くがゆゑに、一朝思ひの外の事出來せむがをりには、勢ひ必ずや孤立無援ならむことを懼れ、心の內凄涼たるを免れず。

敢是宿世因緣吧、這更衣生下了一個容華如玉、蓋世無雙的皇子。皇上急欲看看護這嬰兒、快敎人抱進宮來。一看、果然是一個異常淸秀可愛的小皇子。

敢是これ宿世の因果なり吧。更衣、顏うるはしく玉の如き、世に二なき皇子を生みたまひけり。主上、この赤子を急ぎ見んと欲したまひ、直に人をして抱きて宮の內に進み來らしめたまふ。一度見るや、果して是類なく淸らにして愛づべきの御子なり。

（令和二年七月十五日受附）